



ワムタウン広場

WAM Town Open Space !

発行 一般社団法人ワムタウン推進本部
〒359-1131 埼玉県所沢市大字久米554番地2
TEL 04-2941-3640 FAX 04-2941-3641
http://www.wam-town.jp/ E-mail:koho@tl-wam.or.jp

協力 医療法人啓仁会
医療法人昭仁会
社会福祉法人栄光会

WAM TOWN

7月

第102号 2017年/平成29年7月1日(土)

包括的な支援を目指して ~児童精神科・小児リハ部門の取り組み~

医療法人啓仁会 豊川さくら病院 (愛知県豊川市) 児童精神科 医長 大原 聖子

<子どもの育てづらさ>

「どうしてうちの子どもはかんしゃくがこんなに激しいのだろう?」

「今日もまたお友達に手が出てしまった」

「なぜ、うちの子どもはこんなに落ち着きがないのだろう?」

当科の外来には、集団生活になかなか適応できない、コミュニケーションが苦手、じっとしてられない等で、わが子に育てづらさを感じているお母さんが相談に来られます。周囲から「親のしつけが悪い」等と言われ、辛い思いをしているお母さんが少なくありません。もしかしら、そのような背景には、発達障害に由来する特性が存在しているかもしれません。

<発達障害の特性>

発達障害を持つ子どもたちには、個人内の得意不得意の極端なアンバランスさにより、発達に偏りが見られます。例えば、

- 言葉の成長がゆっくり
- 一方的に喋り、会話のキャッチボールが成立しにくい
- 物事や習慣へのこだわりが度を過ぎている
- 特定の感覚への没頭、または過敏がみられる
- 衝動的な行動が多い
- 気が散りやすく遊びが長続きしない

などの特性が挙げられます。

これらによって“子ども自身が感じる困難”、“子どもを育てていく時にお母さんが感じる育てにくさ”というものが生じることがあります。



よって、特性に合わせた支援が提供されることは、お子さんのみならず母子双方、更にはご家族全体のメンタルヘルスの視点において望まれることでしょう。

<当院での取り組み>

当院では、児童精神科の診療と子どものリハビリテーション(言語療法、作業療法)を2本柱とし、

多職種による、多角的なアプローチを進めています。

【児童精神科】

児童精神科では、発達に関するご相談、また気がかりな事があるお子さんを対象に児童精神科医師が診察を行います。相談内容は言葉や運動発達についてだけでなく、落ち着きがない、感情コントロールが苦手など多岐にわたります。また、就園・就学に関する相談も受けています。

【小児リハビリテーション部門】

子どもたちを対象としたリハビリテーションならではの考え方は、何のために行っているのかを教えるよりも、楽しんで一緒にやってみるといったことが重要になってきます。



小児リハビリテーションの役割は、お子さんの健やかな成長・発達を支えることです。その分責任も大きく、ご家族をはじめとした多くの人とのコミュニケーションが大切になってきます。

◎言語療法

言葉の遅れや発音の問題だけに限らず、対人面及び集団生活上のコミュニケーションのとりづらさなども含め、様々な子どもたちの言語に関する困難さに対して支援を行っています。

例えば、人への関心が低いお子さんや人との関わりが苦手なお子さんには、遊びやロールプレイを通して、人へ注意を向ける練習や人との関わりを楽しむ体験をし、コミュニケーションの力を伸ばしていきます。指示に注目できなかったり、行動がワンテンポ遅れてしまう子どもたちの中には、覚える事が苦手なお子さんもあります。本人の得意な覚え方を探しながら、指示を聞く練習や注目する練習をします。

また、言葉が出ていないお子さんも対象にしています。必要に応じて代替コミュニケーション手段の1つとしてPECS(Picture Exchange Communication System: 絵カード交換式コミュニ

ケーションシステム)を取り入れ、言葉の代わりに絵カードを用いてコミュニケーションの成功体験を積むことを通して、やりとりの土台を育てています。

◎作業療法

子どもたちは、成長と共に、物を触る・操作することを覚えていき、様々な経験が重なり合って発達課題と呼ばれる日常生活に必要な技能を身につけていきます。その経験は、“遊び”を通して身に着ける事が多く、作業療法では、発達の手助けをする中で、その観点を重視します。「落ち着きがない」「不器用」「運動の発達の遅れが心配」など、様々な相談をお母さんたちから受け、お子さんのそれぞれの特性を見て、感覚面・運動面からリハビリを進めていきます。

<関係機関との連携>

当院は、園・学校、療育施設、医療機関など関係機関と常に連携を図りながら、包括的な支援ができるような体制づくりを目指しています。

例えば、

- お子さんの支援の方法に関して園・学校関係者と話し合い
- 定期的な療育訪問事業
- 就園・就学支援に関する相談
- 療育施設や医療機関の間での情報共有 などを

<おわりに>

当院は、豊川市唯一の、児童精神科と小児リハビリテーションを併せ持つ貴重な医療機関です。そのため、周囲からの期待やニーズは非常に大きいという現状があります。多職種が一丸となってこれからも子どもたちの成長に寄り添いながら、地域での医療機関としての責務を果たして行きたいと思っています。



所沢ロイヤル病院に勤めて

医療法人啓仁会 介護老人保健施設 所沢ロイヤル病院 (埼玉県所沢市) 医師 秋本 芳太郎



医師 秋本 芳太郎

平成29年4月17日月曜日より所沢ロイヤル病院の勤務が始まりました。

此処に来る前は、外来だけのクリニックでその訪問診療部門に主に

携わっていましたが、そこでは、特別養護老人ホーム、養護老人ホーム、小規模多機能施設、グループホーム、在宅等を看護師さんが運転する車の二人一組で回っていました。対象は介護を要する、脳卒中後遺症、認知症、癌末期の緩和ケア等の患者さん達でした。看取りも行い、原則として24時間の電話オンコールの待機でした。

ロイヤル病院に勤めて、患者さんの対象がほぼ重なっていることが判りましたが、郷に入っては

郷に従えと言いますので、今までの経験とロイヤル病院の伝統を医局の先生方、看護師さんや、他のパラメディカルの人々の指導を請いながらやっ

回復期リハビリ病棟の安全で安楽な入浴方法

—入浴介助の慣習の改善を試みて—

医療法人啓仁会 平成の森・川島病院(埼玉県川島町) 1F病棟

去る5月27日に川島ロイヤル・ワム・タウン研究発表会が開催されました。今回、11題の発表の中から優秀賞を受賞した、川島病院1階病棟の発表をご紹介します。

I. はじめに

回復期リハビリ病棟の患者は、低下したADLの向上を図るためリハビリ目的で入院してくる。特に入浴動作は、起居・移動動作・更衣・洗体動作など複雑な動作からなり、リハビリテーションの達成の度合いを総合的に確認できる良い機会である。また、患者にとっては、清潔保持以外にも疲労回復、快い入浴では、楽しみにもなり、復帰への意欲にもつながる¹⁾。今回、片麻痺の患者が入浴を拒否することがあった。その理由は、車椅子から機械浴ストレッチャーへ移乗する時、「空を飛んでいるようで非常に怖かった。2度と入りたくない」という訴えであった。このことに衝撃を受け、これを機会に、入浴介助の見直しを行った。その結果、車椅子から機械浴ストレッチャーへの移乗の改善が出来、さらにスタッフの負担改善にもつながったのでここに報告する。

II. 目的

入浴に対する患者の苦痛・不安などの問題点を明らかにし、機械浴での統一した移乗方法を行うことにより、患者の残存機能を活かした安全・安楽な入浴が出来る。

III. 方法

1. 研究期間：H28年10/1～29年2/28
2. 研究対象：入院患者 40名
3. 研究方法：

- ①アンケート調査を実施(スタッフ)。(移送、着脱、移乗、洗い場、その他の項目に分け問題点の自由記入)
- ②アンケート集計をもとにミーティング。(問題点の明確化、改善方法の検討)
- ③移乗を研究スタッフでデモストレーション。
- ④改善した入浴手順を周知し実施。
- ⑤改善実施後のアンケート調査を実施。

IV. 倫理的配慮

患者には事前に入浴方法の変更内容を説明した。また、写真使用にあたっては、今回の研究発表以外には使用しないことを本人、家族に説明し了承を得た。

<改善前のアンケート結果>

車椅子から機械浴ストレッチャーへの移乗方法の問題が71%を占めた。

- 体格の良い患者など、かなり介助者に負担がかかっており危険である。
- 麻痺側の足が取り残され危ないと思うことがある。
- 車椅子から機械浴ストレッチャーへの移乗は難しく感じる。負担が少なくなったらと思う。
- 患者が怖い思いをしないような移乗が理想。
- 麻痺のある患者は、腋窩を持たれると痛そうに患者に負担がかかるのではないかとと思う。
- その人にあった入浴方法をすべき。
- 持ち上げると腰痛の原因になる。
- 大きい男性患者の移乗はきつい。
- 男性スタッフが1人でもいるようにしてほしい。

V. 問題点の抽出から変更まで

1. 問題点

- ①患者の患肢、麻痺側に苦痛が生じる。
- ②介助者の負担が多い(腰痛、膝痛)。

- ③長い間の慣習(車椅子から抱えてのストレッチャーへの移乗)。
- ④その日のスタッフの考えでの移乗(決まった移乗方法がない)。
- ⑤移動シートがあるのに今まで使用していない。これらの問題点から⑤に注目し、シートを使用しなかった理由をまとめた。

- 最低スタッフが4名必要で人出がかかる。
- 車椅子から抱えたほうが時間短縮される。
- ストレッチャーを病室まで運ぶのに時間がかかる。
- 車椅子の方が体重測定しやすい。
- 抱え移乗が慣習になっている。

以上の事をふまえて移乗方法を実際に体験した。

2. 移乗方法の体験

①車椅子から機械浴ストレッチャー

- 患者側：「目がくらくらする」「恐怖」「腋窩が痛い」「ドスンとストレッチャーに置かれるので尾骨辺りが痛い」「これから入浴とは思えない気分」
- 介助者側：「重くて腰にくる」

②ストレッチャー(シート使用)の平行移動

- 患者側：「怖さが無い」「いいね」「シートの入れ方が大事」
- 介助者側：「楽でいい」

<体験結果>

車椅子から抱える移乗は、患者、スタッフともに掛かる負担が大きい。私たちは、患者の負担を考えず、私たちの都合に合わせて動いていることがわかり、そのことが、自ら身体の負担を大きくしていることもわかった。そこで、下記5つの変更を行った。

3. 変更内容

- ①抱え移乗を中止し、入浴シートを使用したストレッチャーによる平行移動。
- ②リハビリ後の機械入浴患者は、車椅子からストレッチャーを低くした状態で移乗。
- ③ADLが変わった場合は、ピンク色の付箋に入浴方法を記入し患者の名前に貼る。
- ④入浴メンバー表の連絡事項欄に変更の内容を記入し周知。
- ⑤毎週、入浴介助を行ったスタッフの意見を聞き印刷し伝達した。

<ストレッチャー平行移動の手順>

(入浴前)

- ①スタッフ4～5名で行う。
- ②サイドレールを外し、患者を側臥位にする。
- ③シートを外側に2回丸め、体幹部奥まで入れ込む。
- ④反対に側臥位にし、シートの丸めてある部分を元に戻す。
- ⑤介助者は、足と頭部、左側、右側に立ちゆっくり機械浴ストレッチャーに平行移動させる。麻痺側を巻き込まないように注意する。

(入浴後)

- ①シートの上にバスタオルを敷き、シートの端を外側に2回丸め体幹部に入れ少し持ち上げる感じで引く。
- ②スタッフ4～5名に、それぞれの位置に立ち介助する。
- ③バスタオルをかけ、脱衣室に移動。
- ④更衣後、病室へ戻りベッドへ平行移動しシートを抜く。

VI. 事例紹介と変更結果

【事例1】A氏 76才 男性 体重67.0kg

脳梗塞 左片麻痺(入浴拒否した患者)

- 患者の反応：「今日のお風呂が一番良かった。患肢の痛みもなかった。時間がかかって申し訳ないが今日のように入れてほしい」
- 介助者の反応：車椅子からの抱え移乗より楽にできた。いつもより時間と人手がかかる。
- 結果：介助者も患者も共に負担が減ったことがわかった。

【事例2】B氏 53才 男性 体重78.2kg

経管栄養(全介助で体格の大きい患者)

- 患者の反応：失語・認知あり反応不明。
- 介助者の反応：「体重があるので、シートの平行移動は、楽でよかった」「介助量が減ったが、その反面シートを入れるのが大変。」「洗体後は、バスタオルがめくれ、滑りが悪くシートが入れづらい。」
- 結果：かなり楽に出来たが、濡れているシートが入れづらい。

【事例3】C氏 87才 女性 体重43.0kg

腰椎圧迫骨折(コルセット使用中の患者)

- 患者の反応：シートを入れる時、ストレッチャーと浴室ストレッチャーの段差を通過する時に痛みの訴えが強かった。
- 介助者の反応：リクライニング車椅子から抱えて移乗する方法に変更
- 結果：リクライニング車椅子からの抱え移乗で痛みの増強が抑えられた。

【事例4】D氏 87才 女性 体重46.3kg

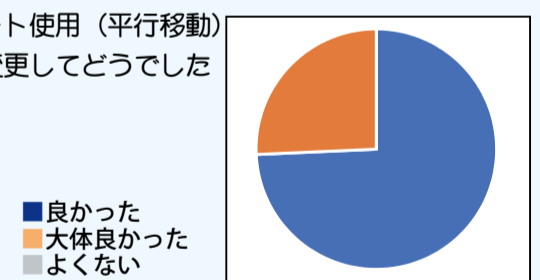
左大腿骨転子部骨折(移動に疼痛を訴える患者)

自室でストレッチャーに自ら座ってもらい横になり浴室へ移動。その後、浴室ストレッチャーに平行移動。入浴後は、ストレッチャーで戻り、シートによりベッドに平行移動する。

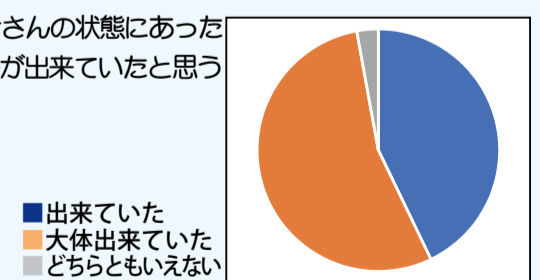
- 患者の反応：抱えられて入っていた時は、かなり痛かった。今は自分で座ってから横になって入るので痛くなかった。自分のペースで動けるからゆっくり出来るし怖くない。
- 介助者の反応：時間がかかった。
- 結果：患者自らストレッチャーに移乗することにより恐怖心と痛みのない動きが出来た。

<改善後のアンケート結果>

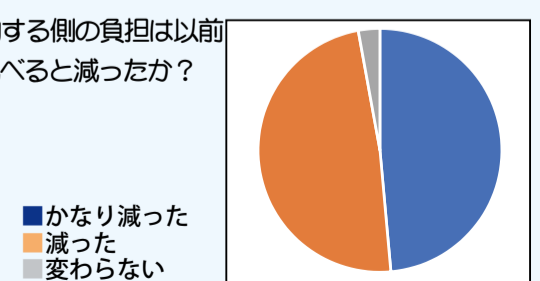
①シート使用(平行移動)に変更してどうでしたか?



②患者さんの状態にあった入浴が出来ていたと思うか?



③介助する側の負担は以前に比べると減ったか?



Ⅶ. 考察

今回の研究で、「ノーリフトケア」という言葉に出会った。それは、危険や苦痛を伴う、人力のみの移乗を禁止し、ケアされる人の自立度を考慮した、福祉用具使用による移乗を行う技術や考え方のことである。看護・介護は、安全かつ安心に基づいたケアでなければならない。しかし、私たちは、一生懸命に人力で移乗を行うことにより、患者に苦痛や恐怖心を与えかつ自分たちの腰痛にも悩まされるといった矛盾を招いていた。入浴では、車椅子から機械浴ストレッチャーにスタッフ2名で抱えての移乗は、「危ない。」や「負担だ。」と個々で思っているものが慣習となり、時間短縮という観点から改善されることはなかった。実際に患者側を体験して、患者が移乗時にいかに恐怖や苦痛を感じていたかを理解することが出来た。今回

の体験を踏まえ、看護研究として病棟全体で取り組んだことにより改善が図れた。

保田淳子氏は、「介助者に腰痛を引き起こすようなしんどい介護は、患者本人にも拘縮や褥瘡の悪化、皮膚損傷などを引き起こし、ケアの質の低下を招く原因にもなっている。『ノーリフト』は、腰痛予防だけでなく、看護や介護におけるケアの質の向上をさせるのに有効である。」と述べている。今回、患者個々の残存能力を引き出す移乗方法を考えたことは、質の向上にもつながり、そのことが、介助者の腰痛の軽減にもなったことは、大きな成果であったと考える。今後は、情報を共有し、統一した移乗を続けていくことが必要である。

Ⅷ. 今後の課題

①体が濡れている入浴後のシートの入れ込みがやりづらい。

②平行移動の患者が増えた場合、時間がかかる。

Ⅸ. 終わりに

回復期リハビリ病棟は、入院期間も3～6カ月と短く、ADLも日々変更される。そのため、患者のADLの能力を考慮した移乗が望まれる。入浴の移乗についても、常にリハビリスタッフと連携を取りながら、より安全、安心、安楽な入浴を心がけていきたい。

引用・参考文献

- 窪田 静・河添竜志郎：「寝たきり起こし」としての入浴介助、訪問看護と介助 Vol4 No10、p.806～813、1999.
- 保田 淳子：「ノーリフトケア」でカルチャーチェンジ、訪問看護と介護 Vol20 No3、p.192～197、2015.

回復期リハビリテーション病棟における転倒傾向と今後の課題

医療法人啓仁会 石巻ロイヤル病院 (宮城県石巻市) リハビリテーション部 理学療法士 駒場 麻衣・松川 祐輝・鈴木 大

石巻ロイヤル病院では、日頃業務を行っている中で生じる課題や、その解決策・取り組み等を共有し、反映していくことで、業務の質や効率を改善することを目的とし、年に一度、業務研究発表会を開催しております。

3月15日に開催された「第5回院内業務研究発表会」では、看護部・リハビリテーション部・栄養科・検査科等様々な職種から計8題の発表がありました。

その中で最優秀賞をいただいた私たちリハビリテーション部は、「回復期リハビリテーション病棟における転倒傾向と今後の課題～自立度評価とFIMの観点から～」というテーマを元に研究・発表を行いました。

回復期リハビリテーション病棟では、脳卒中や骨折など様々な疾患を有する患者を対象とし、在宅復帰に向け、積極的なリハビリテーションの介入を行っています。回復過程にある患者さんは身体機能が随時変化していくため、それに合わせ日々の生活の幅も拡大していきます。しかし、その反面、病棟内の転倒のリスクも増加していきます。転倒が発生することで、骨折等の外傷や、活動性・身体機能の低下を引き起こすだけでなく、

患者さんは不安感や恐怖心を生み、生活動作に影響を与えるため、自立活動や在宅復帰の阻害因子となる可能性があります。

今回の研究では、

- ①当院回復期リハビリテーション病棟における転倒傾向を調査し、病棟全体で転倒を予防するためにはどのような取り組みが必要か検討すること
- ②今後の回復期リハビリテーション病棟全体での関わり方の改善や、生活に反映できる質の高いリハビリテーションの提供を実現することを目的としました。

研究としては、過去の転倒患者のデータをもとに年代、疾患、転倒発生時の環境や目的、転倒の時間帯、再転倒率などから転倒傾向を調査しました。結果として、転倒は自室のベッド周囲で多く発生していることや、入棟直後・自立度変更直後等の情報共有が不足しやすい時期に多く発生することがあげられました。この結果から、



医師による総評

転倒を予防するためには、実際の生活場面での評価の充実や、セラピストと看護師・介護士間での情報共有の徹底が重要であることを再確認できました。

この発表を通し、転倒の傾向や具体的な状況を改めて示したことで、看護師や病棟スタッフからも転倒対策への意識付けが出来たとの声も聞かれ、スタッフ全員で転倒に対する認識を共有できたことはとても良い機会でした。

現在では、効率的でより具体的な評価と円滑な情報共有方法の確立に向けて更なる業務の改善に取り組んでおります。転倒を可能な限り予防することは、回復期リハビリテーション病棟の責務でもあり、質の高いリハビリテーションを提供するための環境づくりの一環です。今後も継続して取り組み、その成果をまた業務研究発表の場で報告していきたいと思っております。



発表の様子

やまゆり保育園「メットライフドーム」での贈呈式

社会福祉法人 栄光会 やまゆり保育園 (埼玉県所沢市) 園長 神山 幸恵

去る4月28日、ロッテ戦の試合前に、メットライフドームグラウンド上で『的当て(遊具・ターゲットゲーム)』贈呈式に招待され、年長の子も達5名が参加しました。埼玉西武ライオンズでは、「ライオンズこども基金」の取り組みで、「的当て」を県内の幼稚園・保育園1750カ所へ贈る活動を行っており、贈呈式には代表としてやまゆり保育園と北野保育園が選ばれました。

贈呈式には、居郷代表取締役社長並びに選手を代表してキャプテンの浅村栄斗選手、そしてマスコットキャラクターのレオくんとライナちゃんが

グラウンドに立って下さり、子ども達は大喜びでした。当日、17時から子ども達が遊んでいる間、打ち合わせを念入りに行いました。「グラウンドでは選手たちの近くで待機するので、試合前の選手の集中の邪魔にならないようにして下さい。」とのお話があり、担任2人と子ども達に伝えましたが、内心ハラハラしました。

17時30分に移動開始。裏方の細く暗い通路を通り抜けた先には、子ども達の憧れの広いグラウンドがありました。17時49分、いよいよ出番の合図がかかり、子ども達は元気にグラウンド中央に向かって行き、とても落ち着いた様子で贈呈式に臨みました。その様子は、ヤフーニュースにもアップされました。応援に来て下さった保護者の方も、グラウンドに降りた子ども達に「いいなあ～」と何度も話しをされていました。贈呈式後は、球団より頂いたチケット

で野球観戦。北林理事長と高野澤施設長も応援に来て下さって、子ども達にとっては一生忘れられない一日となりました。



グラウンド中央での記念撮影

※ライオンズこども基金とは…子どもたちの明るい未来をサポートすべく、ファン・選手会・球団が三位一体となって設立された基金です。「明るい社会・未来を作っていくのは子どもたちであり、子どもたちが安心して夢を持って生活できる環境作りをしっかりとサポートする」という趣旨のもと、ファン・選手会・球団が力を合わせて、子どもたちの明るい未来を支援する活動を行っているとのこと。



みんな、贈呈式がんばってね



憧れの浅村選手が目の前に

横田駅伝に参加しました

医療法人啓仁会 平沢記念病院(埼玉県所沢市) 陸上部 龍前 智彦

当院では4月より陸上部が発足しました。勤務終了後、定期的に病院の周辺を走り健康の増進を目的とした部活です。陸上部の最初のイベントとして、6月4日(日)に福生市の米軍横田基地で行われた横田駅伝に参加して来ました。毎年この時期に開催され、今回で33回となります。陸上部からは20km駅伝(4×5km)に2チーム参加しました。



完走証をもって全員で記念写真

米軍の基地内という事で、いたるところにアメリカらしさを感じる大会でした。箱根駅伝では警察の白バイが先導しますが、この大会ではハーレーダビッドソンが大きなエンジン音を出しながら先導してくれます。基地内の自販機では、エナジードリンクが710mlという見たことのない大きいサイズで売られていました。一般的な日本人が全部一気に飲んだら、危険なのではないかと不安になります。コースの誘導をしてくれる係員も米軍の方で、『イエー、フォー!』とハイテンションで声援を送ってくれます。走りながら私がガッツポーズをしてみせると、『オーウ、グッジョブ!』と手を振り返して応援してくれました。

駅伝の結果は、皆で協力してタスキを繋ぎ全員完走することができました。平澤俊之先生は朝一番で息子さんと2キロのファミリーランに参加、その後には今度は駅伝のメンバーとして5kmを走られました。普段は走る

習慣のなかった永尾看護部長もこの大会に向けて練習を積み重ね、5kmを走り切りました。他のメンバーもケガする事も無く、無事に5kmを走り切っています。

仮装をして参加するランナーも多く見られ、色々な楽しみ方が出来る大会です。陸上部の恒例の参加イベントにしていければと思います。走って日焼けして疲れましたが、みんなで楽しく走って心地の良い疲れです。今後も活動を活発に行い、様々な大会に参加していきたいと思います。



さわやかな笑顔で走る平澤先生



永尾部長、もう少しでゴールです!

さかどロイヤルの園・風景点描

社会福祉法人 栄光会 特別養護老人ホーム さかどロイヤルの園(埼玉県坂戸市) 総務係 緑川 琢也

「さかどロイヤルの園」は、お陰様で今年4年目を迎えます。施設は坂戸市森戸に所在し、所在地である坂戸市は、鶴ヶ島市・日高市・毛呂山町に隣接しています。天気の良い日には、秩父連山や奥多摩方面の山々、富士山を眺めることができます。施設の西側は、東京国際大学のサッカーコートや野球場が広がり、練習や試合をする選手の姿



のどかな眺めです

が見られ、また駅伝の時期が近づくと陸上選手も練習に訪れ、とても賑やかです。

対する東側は、のどかな田園風景が広がります。現在は田植えを終え(この文章を書いている時期は6月初め)、畑の野菜は収穫の時期を今か、今かと待っているところです。その先には大きな桜の樹があり、桜の下には印象的なお地蔵様が祀られています。農道が通学路でもあるため、小さな体に大きなランドセルを背負った小学生が列をなして通学する姿も見られます。また、北側には高麗川が穏やかに流れ、野鳥が羽を休める場所もあり、施設周辺は自然豊かなところです。坂戸市の計画では、高麗川に架かる森戸橋から下流方向に護岸工事を予定しており、完成すれば高麗川沿いを散歩できるようになるそうです。ご入居者の散歩コースが、また1つ増えるので完成が楽しみです。

森戸は江戸時代から続く郷土芸能の「獅子舞」があり、毎年10月14日・15日に国清地祇(くにいちぎ)神社と秋葉社に獅子舞を奉納します。神社は当施設の最寄り駅「西大家」駅前であり、ア



桜色染まるお地蔵様

クセスも良いので、タイミングが合えば獅子舞をご覧になれるかもしれません。また、10月7日・8日には、今年も「坂戸よさこい」が市内で開催される予定です。まだ実現出来ずにいますが、ご入居者の皆さんに活気溢れる「よさこい」の流し踊りと大勢の方の笑顔に触れて頂く機会を作りたいと思っています。また当施設の納涼祭では職員が「よさこい」を披露しますので、こちらも是非、ご覧下さい。

所沢市ならびに周辺都市の町興しに

医療法人啓仁会 平成クリニック(埼玉県所沢市) 院長 構木 睦男

オリンピックが近づき、日本には多くの外国人がやってきます。所沢にも増えるでしょう。従来は直接見たこともない異国の人が沢山見えることでしょう。

その場合、日本語を全く知らない外国人があちこちで戸惑う姿が目に見えます。

そこで、ご提案です。言葉が通じなくて困っている外国人が携帯電話を持っている場合は、スピーカー機能を使って、その人の母国語と日本語のバイリンガルの人に電話を掛ければ、その人の目の前にいる日本人と電話の先にいるバイリンガルが

日本語で会話をして、直ちに問題の所在が明らかになると思います。例えば、所沢在住のバイリンガルの外国人の方々に任意で協力を依頼し、沢山予想される言葉のトラブルを最小限にしようか?ということです。他の自治体に先んじて、このあまりお金も掛からない体制を作って、それを主だった自治体に広げられれば、所沢市の知名度も名誉も否応なく上がると思います。日頃寂しく感じたりしているかもしれない所沢在住の外国人も、故国の同朋の役に立てることは大変嬉しいことだと思います。自尊感情が上がると思います。

また、所沢で外国人を迎える日本語しか出来ない所沢市民の外国人アレルギーが少なくなり、接客力も向上すると思われます。所沢の税収が上がる可能性もあります。

ちょっとした工夫で、①今所沢で困っている外国人、②対応に戸惑う所沢市民、③通訳で人助けに貢献出来た所沢在住の外国人、④外国人が落ちてくれるお金で所沢のお店売上アップ、さらに⑤所沢の税収アップ等にも全部貢献する可能性があります。

是非ともご検討を!